魔法の館

よこやま　さよ

二、三か月に一回ぐらいの頻度であるが、テーマを決めて掌編小説を書き、それを批評し合う勉強会をしている。会場は、古い町並みの一画にある、こじんまりした居心地の良いパブ。古民家をリフォームした店で、木を基調としたインテリア。床には小石が敷き詰められている。ただし、薄暗い照明の下で、小さい文字は読みにくい。それじゃ、最初から明るいファミレスや喫茶店でやればいいと思うかもしれないが、メインは飲み会なので致し方ない。長い付き合いなので、話題は尽きない。望むところに転職したり、家を買ったり、パートナーと新生活を始めたり。会う度に、それぞれの生活が少しずつ変化している。二時間ぐらい飲みながらひとしきり話に興じたあと、さあそれではそろそろ、と誰からともなく言いだし、鞄の中からごそごそと人数分コピーした自作品を取り出すのだ。

字数は六百字以内と決められており、その中で話の落ちをつけるのは難しい。十代の頃に愛読していた星新一の作品のようには、なかなかいかない。

これまではテーマを一つ決めて書いていたが、今回はちょっと趣向を変えて「感・間・館・管・缶・冠・甘・勘・漢・貫」の中から、最低三文字を使って書いてくるということになっていた。以下はその時に提出した拙作である。タイトルは、「魔法の薬」

古びた小さい店だった。**漢**方薬店の**看**板の文字が、ずいぶん薄れて読みにくくなっている。カナは、思い切って扉を開けた。白い顎ひげを伸ばした老人が、棚に並んだたくさんの**缶**の中から、**乾**燥した薬草を取り出し、鍋に入れてかき混ぜている。独特の匂いが漂ってくる。あのーと、カナは恐る恐る声をかけた。「ここで惚れ薬を作ってくれると聞いたんですけど」老人は顔を上げてカナの顔をちらっと見ると、別の缶の中から薬草を取り出して、鍋に加えた。魔法使いの**館**と呼ばれているこの店は、ネットで噂になっていた。ここで調合した薬を飲んで意中の彼と結婚できたとか、別れた彼と復活したとかの書き込みが相次いでいる。老人は、鍋の液体を柄杓で湯呑に移して、無言でカナに差し出した。恐る恐る一口飲んだら、その匂いとは逆に、**甘**い味がした。時**間**をかけてゆっくり飲んでいると、突然お腹が痛み出した。店の隅にあるトイレに駆け込んで用を足した後、カナは老人をにらみつけた。「これって本当に惚れ薬なんですか」「**勘**違いしちゃいけないよ、お嬢ちゃん。人の心はあやつれないよ」「そしたら、この薬湯はなんなの」老人はカナの前に鏡を差し出した。「ほら、店に入ってきたときと全然顔色が違うだろう」そういえば、先ほどトイレで大量の便がでた。一週間ぶりのお通じだった。「まずは自分を整えることだよ。空きを作らないと、新しいものは入ってこないよ」そう言って、老人は口元を緩めた。

あと四文字で、ちょうど六百字になる。指定された漢字六つと、指定外の「かん」を二つ使った。老人が顔を見るところが伏線になっていてよいだとか、この落ちはどうなのか

とか、様々な意見がとびかう。
出された作品を順に合評して勉強会が終わった後も、さらに飲み会は続いた。上司からパワハラを受けていて、田舎に帰る覚悟で退職したら、望む職場が見つかったという人。振り回されていた恋人と思い切って別れたら、よい出会いがあって結婚した人。皆の話をつまみに、酒はすすむ。
店を出たのは、ずいぶん遅い時間だった。家が遠いのでいつもは皆より先に失礼するのだが、その日は気が付いたら終電ギリギリになっていた。
軋んだ木の扉を押して外に出る。辺りは、同じように古民家を改装した店が多いが、ほとんどがもう閉店していた。斜向かいの一軒だけ、窓から明かりが漏れていた。改装をせず古びたままのその店が開いているのを、先に帰っていた私は、今まで一度も見たことがなかった。黒ずんだ看板の文字も消えており、何の店かも知らなかった。
窓の向こうに、ふと人影が見えた。目を凝らしていると、カーテンの隙間から、小柄な老人が鍋を揺らしているのが見えた。あそこは飲食店なのかと尋ねたが、皆は曖昧に微笑んでいる。湯気が立ちのぼり、老人の姿が見えにくくなった。その瞬間に、硫黄のような独特の匂いが、風にのって漂ってきた。
空きを作らないと、新しいものは入ってこないよ
落ちは、やっぱりあれでよかったんじゃないの、と私は皆の笑顔を見ながら、小さく呟いた。